

M. Beard (2008) *Pompeii: The Life of a Roman Town* (Profile Books, London)

The two lives of Pompeii (Introduction, pp. 19–23)

- ・「ポンペイは二度死んだ」(p. 19)
 1. 噴火による急死
 2. 18世紀半ば以降の発掘調査による緩慢な死
 - ← 荒廃、地震、観光客の大量誘致、初期の発掘調査の手法、連合軍による爆撃、盗掘などに起因
- ・「ポンペイは二つの生を生きてきた」とも言える (pp. 19–20)
 1. 古代世界そのものにおける生
 2. 現代において再現された古代都市としての生
 - ・「時間の中に閉じ込められた古代都市」という神話を保持するための様々な努力
 - ・まるで昨日まで「生きた都市で」あったかのように散策ができる
 - ・古代の地層と現代の地層の1フィートの落差が感じられないよう、遺跡入口に工夫
 - ・古代世界と我々の世界が継ぎ目なく混じり合う
 - ・再現されたポンペイ、実際には奇妙な位置にある
 - ・廃墟と再現の間、古代と現代の間の、どこにもない奇妙な空間
 - ・入念な再建：発掘当時の様子と現在のポンペイ、全く別もの
 - ・一義的な目的は、建造物や装飾の保護
 - ・ローマ時代が奇跡的に残存している様を演出する意図も
- ・新たな地理区分 (pp. 20–2)
 - ・近代の地割、地名
 - ・街路名：古代名はほとんどが不詳
 - ・そもそも、近代社会のように全ての通りに名前があったかどうか不明¹
 - ・大きな建物などを目印として用いていた痕跡も
 - ・門の名前も近代のもの
 - ・古代名の痕跡もあるにはある
 - ・建造物の特定システムも19世紀に作られたもの
 - ・Giuseppe Fiorelli（考古学者、政治家）：街を9街区に分割、個々の家屋に番号付け
 - ・固有名を持つ家屋も
 - ・発掘時の状況や出土した遺物に因んだ命名も
 - ・元の住人とされる人物の名が冠される事が多い
 - ・ただし同定の手法にはいかがわしさがつきまとう
 - ・同定が正しいと確定できる例もある
 - ・かなり怪しい例も (e. g. The House of Vetti, Africanus の娼館)
- ・「我々のポンペイ」と79年に破壊された都市との間には、大きな溝がある (p. 22)
 - ・便宜上の理由から、本書では一貫して近代の地名、街区番号を採用
 - ・ただし、これらの呼称が不正確なものである事には注意を喚起する
 - ・「我々のポンペイ」と「古代ポンペイ」の差異について更に検討を続けたい
 - ・「古代ポンペイ」は如何にして「我々のポンペイ」に変えられてきたのか
 - ・発掘された遺跡に我々が意味を与える過程とは、如何なるものであるのか

¹ 日本と異なり、イギリスを始め欧米の街では全ての通りに名前がついているのが一般的。

・ 19世紀の旅行者によるポンペイの体験 (pp 22-3)

- ・ 19世紀の旅行者たちのポンペイでの体験を振り返る
 - ・ 21世紀の観光客同様、昔の世界に滑り込むという幻想を楽しんだ事は間違いない
 - ・ 過去がどのように姿を現すか、という事にも興味関心を抱いた
 - ・ ローマ時代のポンペイについて我々は「何を」知っているのか、ということと同時に、それを「如何にして」知っているのか、ということ
 - ・ *Murray, Handbook for Travellers in Southern Italy (1853)*
 - ・ 大衆による観光旅行時代の始まり：実際的な指南を多数含む
 - ・ 遺跡に関する解釈上の問題を提示、発掘の年代や状況についても説明
 - ・ 今日の旅行ガイド本からは欠落した視点
 - ・ あたかも、19世紀の旅行者は、頭の中に二つの時系列（古代ポンペイの歴史と近代におけるポンペイの歴史）を並行して収めておかねばならなかったかのよう
 - ・ 「人骨発掘現場の演出」も、同様の関心の異なる表れと言えるかもしれない
 - ・ そもそも、自分が通りかかった時に偶然人骨が発見されたと本気で信じた要人がいたとは考えにくい
 - ・ ニーズがあればこそ行われた演出：遺物そのものだけではなく、過去が光の中へ現れ出る発掘の過程に対する関心が強かった事の現れ

A city of surprises (Introduction, pp. 23-5)

- ・ 驚きに満ちた都市ポンペイ (pp. 23-4)
 - ・ どんな専門家にも、ローマ時代のイタリアに関する思い込みについて再考を迫る多様性
 - ・ ユダヤ人社会の存在（食物規定を遵守した魚醤）
 - ・ ローマとFar East²との接点（インド製の象牙の女性像、猿の頭蓋骨）
- ・ 予想外の都市 (pp. 24-5)
 - ・ よく知られている街であると同時に、知らない事の多い街でもある
 - ・ ウェスウィウス山麓の一地方都市であると同時に、ヒスパニアからシリアまで広がる大帝国の一部として、多様な文化・宗教を擁した街でもある
 - ・ 「ソドム」「ゴモラ」の落書き
 - ・ （後代の盗掘者によるものでないとすれば）ポンペイの風俗・倫理規範についての目撃証言
 - ・ 「創世記」（旧約聖書）を知る住人がいた事の証左
 - ・ 市民人口数千人の小都市であると同時に、ローマ史の中心部に大きく影響を与える街でもある
 - ・ （第一章を参照）

² 日本語の「極東」とは指示範囲にずれがある。インド半島は 近東 Near East、中近東 Middle East に入らないという限りにおいてFar East に分類されることがある。『リーダーズ英和辞典』Far East の項目を見よ。